

をいさせじと、大事のてにもてなじめでのあぶみにおりさがり、馬をこだてにとり、山たちありや、せんぢんはかへせ、ごぢんはす、めとよばはりければ、せんぢむごぢんわれおとらじとす、めども、所しもあくじよなれば、むまのさぐりをたどるほどに、二人のかたきはにげのびぬ、

〔平家物語^四〕きをほが事

三位入道源頼政のちやくしいづの守なかつなのもとに、九重に聞えたる名馬有、かげなる馬の雙

なき逸物のりはしり心むけ、世に有べき共覺えず、名をば木の下とぞ云れける、宗盛の卿使者を

立て、聞え候名馬を給て、見候は、やとの宣ひつかはされたりければ、中伊豆守ちから及ばず、

一首の歌を書添て、六はらへ遣さる、

戀しくばきてもみよかし身に添る景をばいか、はなちやるべき

宗盛の卿まづうたの返事をばし給はで、あつはれ馬や、馬はまことによい馬で有けり、され共あ

まりに惜みつるがにくきに、主が名のりをかなやきにせよとて、伸つなといふかなやきをして、

馬やにこそ立られけれ、客人来て、聞え候名馬を見候は、やと申ければ、その伸つなめにくらお

け、引出せ、のれ、うて、はれなんとぞ宣ひける、伊豆守、此よしをつたへき、給ひて、身にかへて思ふ

馬なれ共けんるに付て取る、さへ有に、剩天下のわらはれ草とならんずる事こそやすからね

と、大にいきどほられければ、中同き十六日治承四年五月の夜に入て、源三位入道頼政、ちやくし伊

豆守仲つな二なん源大夫判官かねつな、六條藏人なか家、其子藏人太郎なみつ、いげ混甲三百

よきたちに火かけやきあげて、三井寺へこそ參られけれ、爰に三位入道の年比の侍に、渡部の源

三きをほの瀧口と云、者あり、はせをくれてと、まりたりけるを、六はらへめして、中大將宗盛

さらば奉公せよ、頼政法師がまけんをんには、ちつ共おとるまじきぞとて、入給ひぬ、朝より夕部

にをよぶまで、きをほは有り候、有り候とてまこうす、目もやうくくれければ、大將出られたり、